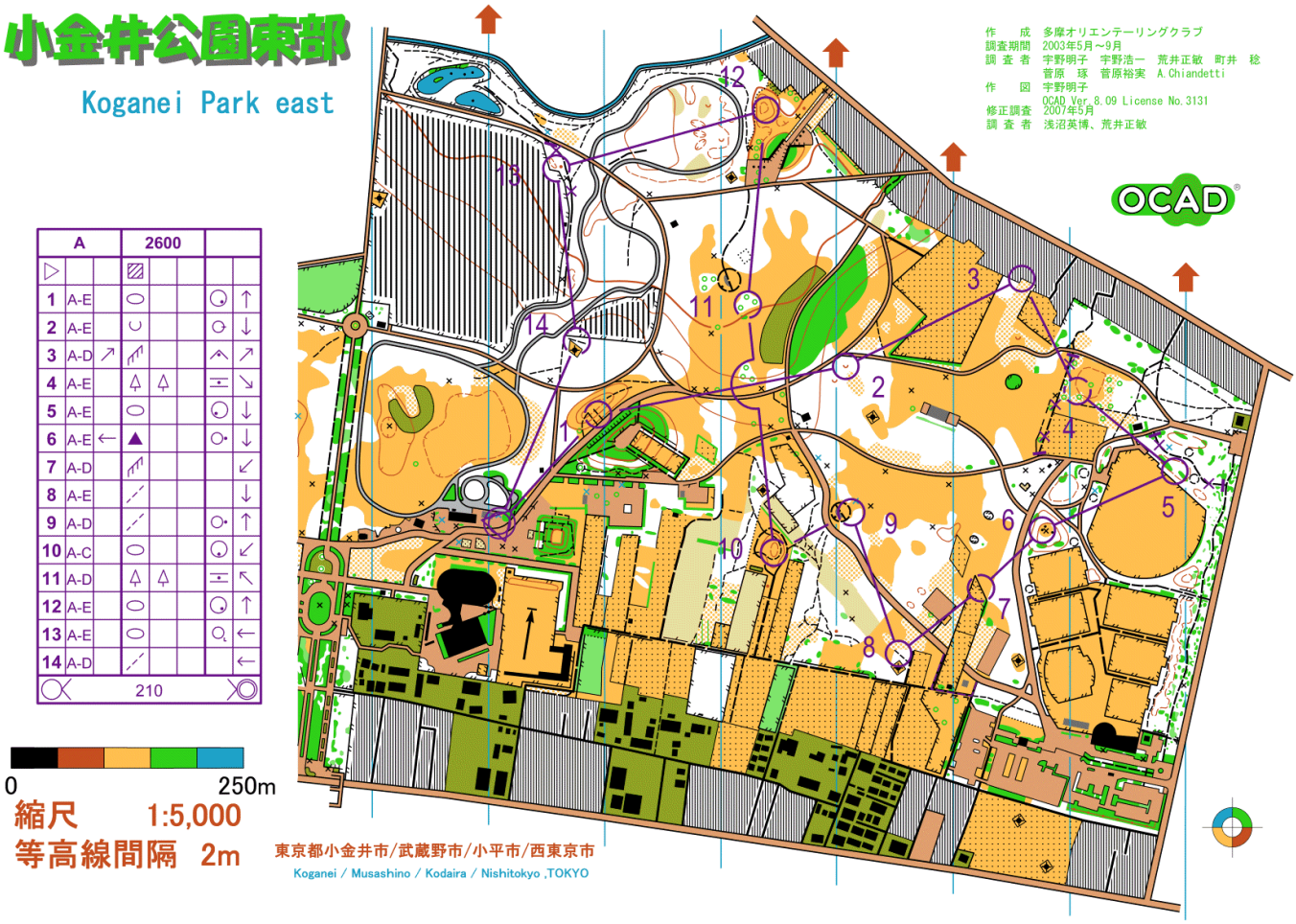
大会報告

きわめてテクニカルな・・・

2007年9月24日 東京トレイルO大会 in 小金井（小金井市ほか）

トレイルO委員会
こやま たろう



武蔵野の面影濃い広大な自然公園のコースに挑んだ。ここにコースを振り返って、いささかの分析を試みる。

武蔵野の林

大久保裕介が第6位に食い込んだウクライナでの世界トレイルO選手権大会(WTOC)の興奮が醒めやらない9月24日に、東京西部の小金井公園で今年度初めてのトレイルOの指定大会が開催された。

次回WTOCの出場権につながる第4回JTOCのE権獲得のチャンスとあって、Aクラス47名、Nクラス12名のトレイル・オリエンティアがコースに挑んだ。

日比谷公園の約5倍78h)を誇る小金井公園は、かつての武蔵野の林もかくありなんと思わせる広大な緑豊かな都市公園であり、以前から何度かフットOの大会が開かれている場所であるが、WTOC後の初のトレイルO指定大会が「東京トレイルO大会 in 小金井」として東京都オリエンテーリング協会の主催で開催された。

曇天の祝日であったが、にわか雨に見舞われたのが競技終了後だったのは天のお恵みか。

2時間では足りない

UP 0mの全くフラットなコースだが、Aクラスの2.6km（14+1コントロール）を 2hでまわるのはいささかキビしい。

コース・プラナーは、昨年こそ日本代表の座を若手に譲ったものの、数度のWTOC経験者である杉本光正。作成したコースはNクラスは1.1km7コントロールと適当（制限時間60分）。

Aクラスは2.6Km14コントロール＋1TC。コントロール数としては適当だが、公園東部のほとんどの部分をカバーするコース距離の2.6kmは、制限時間120分としては目いっぱいで,事実、時間が足らず、最終コントロールからゴールまでは遅れまいと必死に走る者が続出。そのうち車椅子参加者さえもエスコートに押されて走る。（車椅子競技者にとっては非常に危険である。ぜひ余裕をみた制限時間でありたい）

[ちしき] 制限時間のひとつの算出方法

コントロール数×3分 ＋ コース距離100mごと×3分＝目安の制限時間

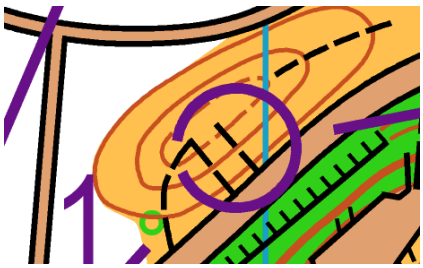
この計算方法はEクラス対象のものなので、通常はこの時間に＋αを加える。もちろん路面状況や、高低差の程度により時間が加算されるが最大でも150分である。（日本競技規則23.5）

なお、障害の有無による時間差はつけない。その理由はいうまでもなくトレイルOの「平等な条件下で競技する」という原則に反するためである。

Aクラス Easy & Technical…

①「こぶ（丘）、南東の部分」

等高線が読めればやさしい。

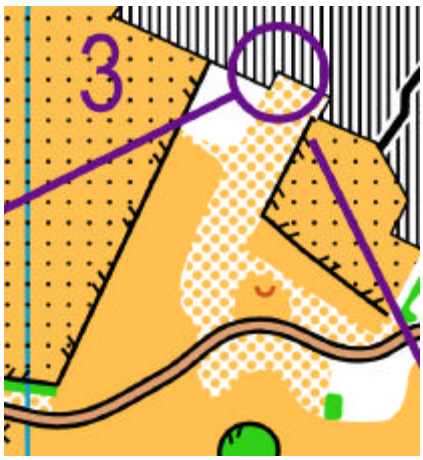


②「小凹地、東のふち」
円の中心にはない20m程離れた同一特徴物（小凹地）にフラッグを集中してセットし注意力をそらす・・・という「Z」の典型的パターンでやさしいはずなのだが、どういうわけか気付かなかった人が多く正解率の 57%は意外に低い数字。なぜ気付かなかったのか。フラッグの集中設置と、周辺のイメージが違った感じにとれたのか。

②密集したフラッグに惑わされる？

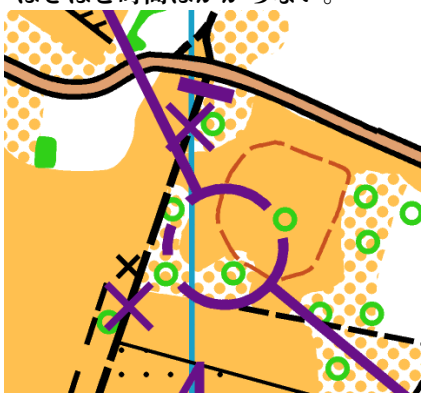
遠すぎるコントロールも

③「北東のフェンス、北の角（内側）」
正解率は 72%と低くはないものの、DPからの距離は地図上で 20mm＝100m と非常に遠いコントロールである。
道路上を移動しても 70m ほどにしか近づけず、しかもコントロール周辺が林で暗く、背の低い雑草の下生えと相まってきわめて見づらい。遠すぎるコントロールの一例。



[ちしき] DP からコントロールまでの距離
「いたずらに遠くならないように・・およその目安としてはE,A クラスでは 40m 程度まで・・,N クラスでは 5m 程度以内が適当とされる」（日本競技規則附則「ガイド・ライン」3.5.1）。
見通しの良否、天候、競技時間帯による可視度の変化、競技者の視力差などを考慮して極端に遠いコントロールは避けるのが原則である。

④「目立つ木と木の間」
「～の間」を使った課題は易しそうで案外難しいが、対象および周辺の特徴物との位置関係を地図上で確認し、その整合性の面から攻めれば、一般的にはさほど時間はかからない。



日陰のコントロールはつらい

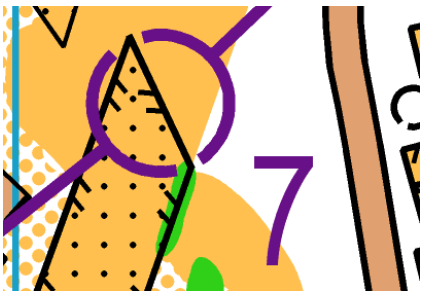
⑤「こぶ（丘）、南西の部分」。
DP と正解フラッグの距離は約 50m。少し遠いが一般的には許容範囲だろう。
　このコントロールで問題となるのは周辺上部の密生した樹木のために、コントロール・サイトが非常に暗いことだ。しかも後方はグラウンドのために逆に明るく、コントロール・サイトとのコントラストがきつすぎて、各フラッグがきわめて確認しづらい。
しかもここでは課題を解くためには、円のセンターが隣接する特徴物（茂み）から 0.5mm 外側へずれている（離れている）ことを読み取る必要があるという、高度なテクニックが要求される。曇天や朝夕の条件下での 0.5mm のズレの確認は、いささかきびし過ぎると思われる。
　さすがに正解率は落ちて 49%。間違った競技者の多くは、この 0.5mm(＝1m)を読みきれていず、茂みの角のフラッグを選んでいる。しかし一方では半数が正解を出してもおり、今後の検討に値するコントロールであろう。

⑤距離が遠いうえに日陰でフラッグ位置がよく見えない。（望遠で撮影）

⑥「西の岩、東側」
易しすぎて、なにか 企みがあるのではないかと思わせるイージー・コントロール。素直になれなかった人４人。

⑦「フェンス」
耕作地を囲んだフェンスの、ある一辺の1/2のポイントを特定するスキルを求めるコントロール。易しいようだが、フェンスの一方の終端が確認しづら

く悩ませた。競技者は多くの抽斗を開けたはず。



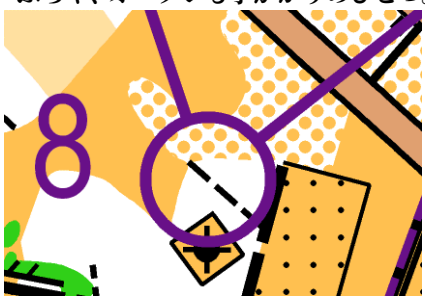
T/C場所の選定はむずかしい

T/C「まん中の目立つ木、北東側」

フラッグまでの距離が約70mと少し遠いことと、コントロール・サイトが公園の入り口であるため、また、祝日のため通行人が非常に多くフラッグが確認しづらく、T/Cにおいて最も重要な「課題への集中」が出来ない状況もあって回答率は45%とT/Cとしては非常に低い。当日の周辺状況が事前に予測できず、残念ながら、T/Cとしての場所選定を誤ったといえよう。

⑧「小径」

小径上にあるフラッグを確認するもの。チェック・ポイントが縦方向に重なって見えるので意外に難しいが、道路を大きく動いて眺める角度を変えてチェックすればわかってくる。林のふちや、オープンも手がかりのひとつ。



⑨「モニュメント、東側」

巨大モニュメントのため、かえって方位がチェックしにくかった？ 特徴物のサイズが大きいと回り込めないので中間方位が確かめにくい。なお、地図表記はモニュメントの記号もなく円形の「道」になっており、要一考。

⑨巨大すぎてフラッグの方位判定が・

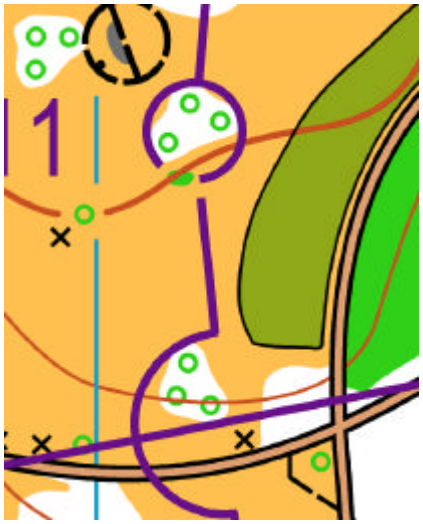
⑩「こぶ（丘）、南の部分」

きわめて簡単。もうひとつフラッグを増やすことで難易度が大きく変わってくる。このままではもったいない。

移動して確認しよう・・というが

⑪「目立つ木と木の間」

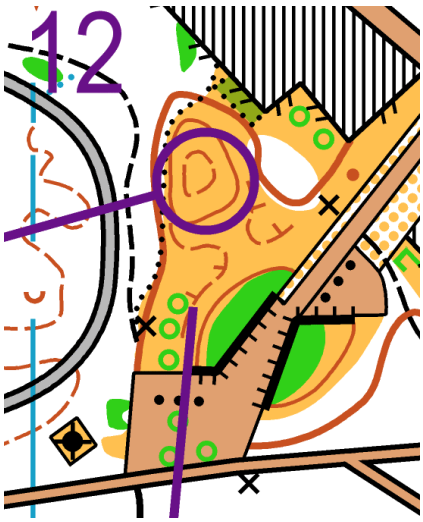
ここも約75mと、ちょっとDPから距離があるが、③とは違って、こちらは周辺が広い芝生で非常に見通しがよい。回答を出すには150mほど移動して、別角度からの観察が必要となる。この移動を怠ると正解は出ないのだが車椅子競技者にとって150mの往復移動はさほど簡単ではないはずだ。さて、それではどうすればよいか?



⑫「こぶ（丘）、南東の部分」

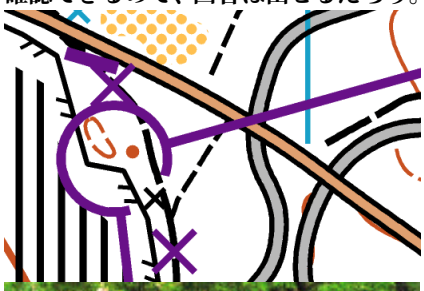
草が刈られて丘の形状が非常にクリアに見える気持ちの良いコントロール。補助等高線読みがキー・ポイントとなるがここでは簡単には行かない。

数件のZ回答が見られるが、このようにフラッグが近接した場所でZを作るのは、逆にセッター側としては簡単には行かない。



⑬「こぶ（丘）、南東の根元」

DPから約70m離れており、こぶと小さなこぶが重なって見える。見た瞬間は「ウヘー」といいたくなるが、進入禁止の表示の無い道を移動することによって25mほどの距離にまで近づき、確認できるので、回答は出せるだろう。



⑬「こぶ（丘）、南東の根元」

⑭「小径」

難易度の非常に高いコントロールである。フラッグ群は道路から見て、高圧線鉄塔を囲むフェンスを越えた向こう側にちらちらと見える（正直言って確認しづらい。車椅子の目線で実際にはどのように見えたか…？）

DPで留まっていては絶対に回答は出ないので約100mを移動して南側からのチェックとなる。しかし、動けば必ずフラッグ順がリバースすることになる。

フェンスの東側のライン（北東－南西）の延長線上にあるフラッグCと、その東にあるフラッグDを判定してセッティング・パターンをつかむことが有効。各フラッグが等間隔に並んで

いることに気付くかどうかも。さらにフェンスの南の角からの円の中心への角度からのチェックなど様々なテクニックが考えられるがむずかしい。

正解率は全コントロール最低の 15%を示した。47 人中 7 名しか正解していない。この正解率の低さは分析・検討に値しよう。さすがに上位の５名は正解しているが、どのように正解に至ったかにその技法に興味がある。

さて成績は・・満点者あり！

Aクラス：（上位８位まで）

１、	鈴木 規弘	15p	22.0sec	満点
２、	○木村 治雄	14p	10.0	⑫
３、	○降旗 健	14p	20.0	⑤
４、	田中 徹	14p	21.0	⑭
５、	○浅野 昭	14p	31.0	⑪
６、	○田代 雅之	14p	31.5	⑤
７、	○山崎 貴幸	13p	15.0	②⑭
７、	○高田 弘樹	13p	15.0	⑦⑭

○＝今回新しくE権を獲得した者
各人の末尾の数字は、間違ったところ。

なお、T/C でのタイムに 0.5 秒の表現があるのは、本大会では２人の計測員を配置したことによる。２人で計測した場合で、計測タイムが同一でなかった場合は、平均値を出すと 0.5 秒の表示となる。

[**ちしき**] T/C における 0.5 秒表示は IOF 規則 24.3 で認められており、日本規則 2.3 により日本でも使用可能である。

Nクラス：（上位３位まで）

１、	高柳 宣幸	7p	満点
１、	村田 直之	7p	満点
３、	鈴木 光子	6p	
３、	齋藤英津子	6p	
３、	鈴木 健	6p	
３、	井上麻衣子	6p	
３、	松田 康宏	6p	
３、	今井 寿彦	6p	

言うは易し、されどされど・・・

指定大会にふさわしい充実した内容の楽しい大会を主催され、提供された東京都協会にお礼を申し上げたい。

実は筆者は本大会のコントローラを勤めた。文中でも触れたが、今回の大会ではいろいろな要検討課題の提示があったように思う。コースを興味深いものにする工夫と、競技規則との相反する点をどう融合させるか。つまり、コース・セッターの意図とコントローラの考えとが一致しなかった場合、どこまで歩み寄り、妥協点を見出せるかの限界などの課題である。

日本のトレイルOの国際的評価・地位・期待観はますます向上しつつあるのは事実である。しかしトレイルOの発展の過渡期にあるわが国としては、新しい工夫の試みと同じくして、いま少し競技規則や作図規程などの基本的事項の理解、遵守を望みたい気がするのも確かである。まずは正しい発展を目指して、基礎的な正しい知識をしっかりと身につけて欲しいと思う。

（小山太郎）